

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01326

研究課題名（和文）石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究

研究課題名（英文）A Study of the Dunhuang Oasis Area from the Perspective of the Cave Temples

研究代表者

坂尻 彰宏（Sakajiri, Akihiro）

大阪大学・全学教育推進機構・准教授

研究者番号：30512933

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、仏教石窟寺院を歴史資料としてあつかい、海外調査をもとに総合的に分析することで、敦煌オアシス地域の歴史像の再構築を目指した。海外調査としては、まず、感染症流行の影響で中国渡航が制限されていた期間を活用し、欧米の美術館・図書館等で関連資料を調査した。とりわけ、米国の調査では貴重な敦煌画を詳細に記録・分析できた。また、制限解除後には、中国・甘粛省・敦煌周辺の石窟の現地調査を行い、石窟内部の壁画・銘文を観察し、石窟の立地環境を整理した。とくに、これまで未公開だった昌馬石窟の調査を行い、貴重なデータを得た。以上の活動から、敦煌オアシス地域の新たな歴史像構築のための基盤を作ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、まず、昌馬石窟のような未開放石窟を含め、敦煌オアシス地域の石窟寺院の立地環境を網羅的に調査したことである。それにより、山地とそこから流れる水系、その水系につながるオアシスによって構成されたオアシス地域の構造の中に、石窟寺院を明確に位置付けることが可能になった。それにより、歴史・地理・美術史・仏教学を統合した切り口でこの地域の石窟寺院を研究する際の基盤を作ることができた。また、関連する文書や絵画資料を詳細に調査したことで、石窟とオアシス社会との関係を掘り下げる材料を確保することもできた。本研究の社会的意義は、国際交流の継続の貢献と報告会や報告書による研究成果の公開である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to reconstruct the historical image of the Dunhuang Oasis region by treating Buddhist cave temples as historical materials and conducting comprehensive analyses based on overseas surveys. During the period when travel to China was restricted due to infectious diseases, we investigated relevant materials in museums and libraries in Europe and the United States. Notably, the research in the United States allowed us to meticulously record and analyze valuable Dunhuang paintings. After the travel restrictions were lifted, we conducted on-site surveys of the caves around Dunhuang in Gansu Province, China. During these surveys, we observed the murals and inscriptions inside the caves and organized the environmental context of their locations. In particular, we investigated the previously undisclosed Changma Caves and obtained valuable data. Through these activities, we have laid the foundation for constructing a new historical image of the Dunhuang Oasis region.

研究分野：東洋史

キーワード：敦煌 オアシス地域 石窟史料 現地調査

1. 研究開始当初の背景

その歴史的重要性にもかかわらず、敦煌オアシス地域の石窟寺院そのものは、当該地域の歴史研究の対象や材料として十分に活かされてこなかった。敦煌オアシス地域を含む河西回廊オアシス地域は、東西を結ぶ交通上の「回廊」であると同時に、仏教石窟寺院の「回廊」でもある。各オアシス地域には例外なく石窟寺院があり(図1)、これらは、当該地域ひいてはイスラーム化以前の中央ユーラシア世界の歴史を復元する上で不可欠な存在である。

ただし、これらの石窟寺院は、ともすれば仏教東漸の痕跡を示すものとしてのみ扱われがちであった。そのため、石窟寺院の存在は、当該地域に対する歴史的理解を、東西交通・交流の通過地点という一面的なものにとどめる一つの要因になってきた。また、敦煌オアシス地域を扱う歴史研究者は、オアシス内で展開された社会・経済活動を解明することを重視し、必ずしもオアシス外の石窟寺院そのものには十分な注意を払ってこなかった。そのため、石窟史料(歴史資料としての石窟寺院の位置、景観、構造、壁画、仏像、供養人像、銘文等の総称)を使用する場合でも、石窟内の銘文などの文字史料を、石窟そのものや壁画・仏像等から切り離して使用することとどまってきた。さらに、石窟内を扱う美術史研究者も、石窟内の壁画・仏像等の主題・構成・様式・技法等の分析に集中し、石窟の外にあるオアシス地域への関心は薄かった。

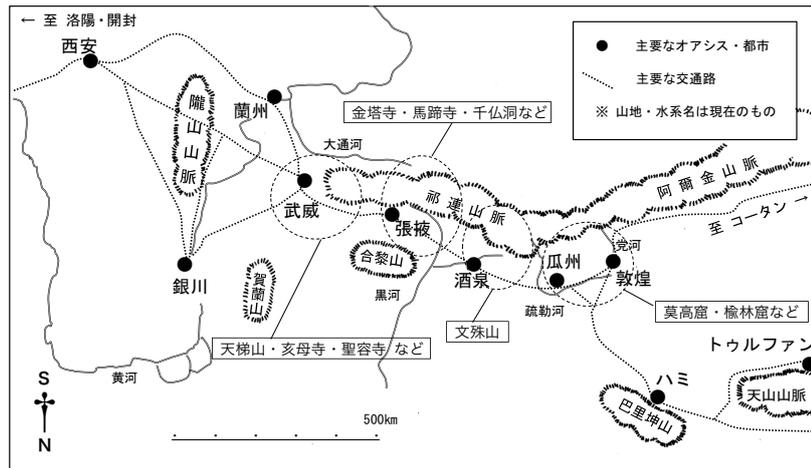


図1 河西回廊の主要オアシスと石窟寺院

2. 研究の目的

本研究の目的は、石窟寺院を切り口に、7~13世紀の敦煌オアシス地域の新しい歴史像を描くことであった。具体的には、従前の歴史・美術史研究では部分的にしか分析されていなかった石窟寺院を総体的に把握するために、石窟寺院を中心とする地形、石窟寺院と山地・オアシスとの配置関係、石窟周辺の宗教遺跡(仏寺・仏塔・祠堂など)、複雑な造営背景を持つ石窟寺院の構造的特徴、壁画や仏像の年代や製作背景および当時の信仰との相関関係、石窟造営・寄進に関与した人物の像(供養人像、図2)、各種の銘文・碑文、莫高窟蔵経洞から発見された敦煌文献のうち石窟に関するもの、といったさまざまな史料を、歴史学・美術史学・地理学・仏教学のそれぞれの専門家が協働して分析し、敦煌オアシス地域の特質を明らかにすることを目指した。



図2 榆林窟第34窟の供養人像

3. 研究の方法

まず、研究対象とする時代の中心を9~11世紀とし、その前後の時代(7~9世紀、11~13世紀)と比較する研究体制を構築することとした。なぜなら、9~11世紀は、敦煌オアシス地域に独立王国(帰義軍節度使政権)が成立していた時代だからである。そのため、中華王朝や匈奴・ウイグル・古代チベット帝国(吐蕃)などの遊牧帝国の直接の影響を受けることがなく、オアシス地域の独自性を見出し易い。また、敦煌文献中には、9~11世紀に属する古文書史料がとりわけ多く残されており、その情報を援用できる。この時代を研究の軸にすえ、9世紀以前のチベット時代や11世紀以降のウイグル時代・西夏時代等と比較検討することで、時代による変化や共通点を把握することができる。

次に、研究の終了時まで以下の二つの調査・研究活動を行う計画を立てた。

第一に、莫高窟や榆林窟などの比較的規模の大きい石窟寺院(図3 四角囲み)において、共同調査を行い、石窟寺院とオアシス地域との関係について一定の見通しを得る。莫高窟や榆林窟は石窟の数も多く、敦煌オアシス地域のさまざまな人びと関わったことが明確な石窟も多数存在している。このうち、特に地域との関係が深いことが見込まれる石窟約60窟の銘文、供養人像、壁画等を集中的に調査し、敦煌オアシス地域のどのような人びとがどのように関わって

るか、その特徴や共通点を整理する。あわせて、周囲の仏塔等の関連遺跡や景観等の調査も行うこととした。

第二に、より広範囲に分布する小規模な石窟寺院等に調査を拡大し、石窟寺院とオアシス地域との関係の全体像を把握することを目指した。調査対象となる石窟（五个廟、西千仏洞、東千仏洞、小千仏洞（水峡口石窟）、早峡石窟、昌馬石窟など、**図3 円囲み**）は、敦煌オアシス地域全体に分布しており、それぞれの内容や立地や景観を調査することで、敦煌オアシス地域全域のオアシスと石窟寺院の関係の傾向を把握できる。また、これらの石窟の多くは、銘文、供養人、壁画等の本格的な調査がなされておらず、新たな発見も大いに期待できる。さらに、可能であれば、隣接する酒泉オアシス地域の文殊山石窟等（**図1**）の景観調査を行い、敦煌オアシス地域との共通点・相違点を抽出し、比較の材料とすることも計画した。

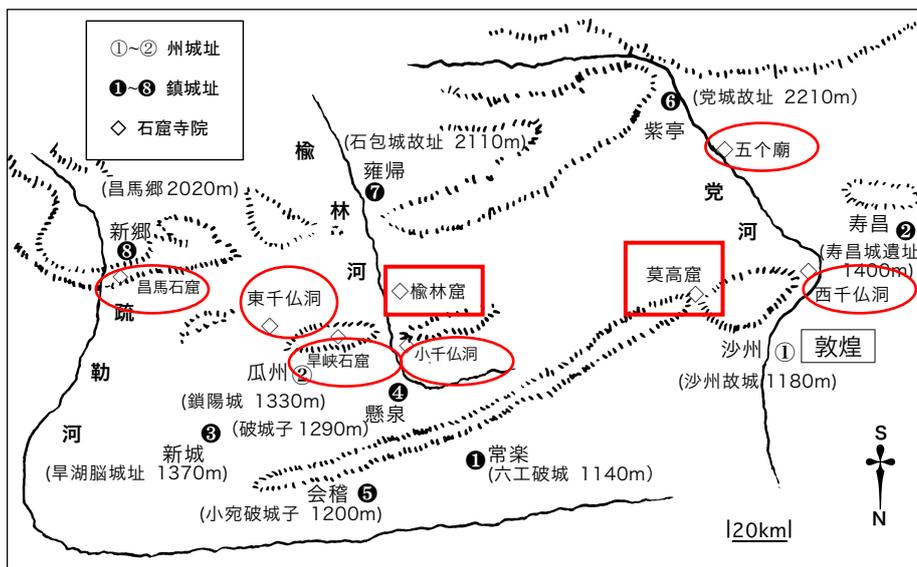


図3 敦煌オアシス地域と石窟寺院 ※城址名は10世紀の名称

4. 研究成果

上記の方法による計画は、予期せぬ新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により大幅に変更を余儀なくされた。中国での現地調査は、2022年度まで中国渡航が厳しく制限されたため、2023年度まで実施することができなかった。そのため、現地調査の再開までの期間は、調査の対象を順次渡航が解禁されたアメリカやヨーロッパでの関連資料の調査や日本国内での研究に充てざるを得なかった。

アメリカやヨーロッパでの関連資料の調査としては、まず、フランスとドイツで壁画資料調査を行い、敦煌と西域北道の石窟文化における類似点と非類似点を検討した。また、フランス国立図書館とギメ美術館にてウイグル語写本の調査を行い、敦煌出土のウイグル写本を通じて敦煌やその周辺の仏教文化について考察をすすめた。さらに、アメリカの美術館（ワシントン・フリーアギャラリー、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ボストン・ボストン美術館およびハーバード大学美術館）を訪れ、現物調査の記録やそれに基づいた研究が極めて少ない10世紀の敦煌画を調査した。とりわけ、アメリカの資料は、石窟も含めた敦煌の絵画作成の歴史背景を知る上で貴重な材料であり、2件の研究論文として迅速に公表した。

日本国内では現地調査に依らない研究も地道に継続した。まず、旧ソ連作成の地形図や衛星画像などを使用し、リモートセンシングの手法を用いて河西回廊西部地域と石窟周辺の地形解析を行い、専門学会にて発表した。また、文献等による西夏時代の石窟や寺院遺跡の分布状況からみた西夏の支配の広がり、特徴的な称号（功臣号）の分析による節度使の供養人像の歴史的背景の整理なども進めた。

2023年度に行った現地調査では、より広範囲に分布する小規模な石窟寺院等の調査を優先し、石窟寺院と敦煌オアシス地域との関係の全体像を把握することにつとめた。調査対象は、大規模な莫高窟と中規模な榆林窟に加え、小規模な五个廟石窟、西千仏洞、昌馬石窟などに広げ、立地や景観を中心に調査した。とりわけ、昌馬石窟は今まで外国人に公開されておらず、今回の調査によって貴重なデータを得ることができた。また、隣接する酒泉オアシスの文殊山石窟も調査対象に含めて、敦煌オアシス地域との比較検討の視座を得ることができた。なお、今回調査した文殊山石窟の後山地区もこれまで外国人にはほとんど公開されておらず、現地での観察により供養人像や銘文などに新しい発見があった。

以上の調査・研究により、石窟寺院からみたオアシス地域全体の信仰圏の様相や、山地も含め

たオアシス地域における石窟寺院の社会経済的機能を歴史的に解明するための基礎を打ち立てることができた。オアシス地域の構造は「山地—水系—オアシス」が一つの単位となり、交通路がオアシスを繋ぐ形になっている（図4）。このなかで、石窟寺院は山地とオアシスの間の水系沿いに分布している。この地点は山地牧民やオアシス定住民の生活圏の接点に位置し、水資源や地形の面でも最も造営に適した場所が選ばれていることが今回の調査によって明確になった。本研究の成果は、石窟寺院を切り口にして、オアシス地域全体の歴史的構造を明らかにするモデルを構築する基盤づくりのために大いに貢献したと言える。

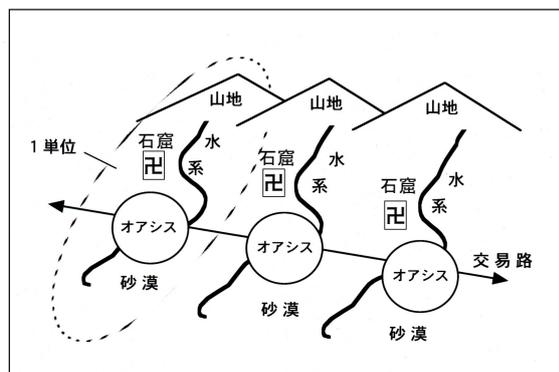


図4 オアシス地域の概念図

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 檜山智美（著） 藺君茹（訳）	4. 巻 194
2. 論文標題 敦煌莫高窟第 285 窟西壁壁画中的星宿图像与石窟整体的构想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 敦煌研究	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 赤木崇敏	4. 巻 17
2. 論文標題 敦煌の功臣たち 曹氏帰義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像（三）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 67-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Kitsudo	4. 巻 43
2. 論文標題 Uyghur Inscriptions on the Wall Painting of Bezeklik Grottoes in the Serindia Collection of the National Museum of Korea (Korean).	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Ancient Central Asian Writings in the National Museum of Korea II - Written Materials Excavated from the Tarim Basin (Korean). 日帝強占期資料調査報告	6. 最初と最後の頁 112-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Kitsudo	4. 巻 43
2. 論文標題 Bezeklik Mural Fragments (bon 4058) with Restored Chinese Character Inscriptions in the National Museum of Korea (Korean).	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Ancient Central Asian Writings in the National Museum of Korea II - Written Materials Excavated from the Tarim Basin (Korean). 日帝強占期資料調査報告	6. 最初と最後の頁 180-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩本篤志	4. 巻 18
2. 論文標題 敦煌石窟における女性の出行図の表徴をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 21-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂尻彰宏・田林啓	4. 巻 18
2. 論文標題 米国フリーア美術館蔵水月観音菩薩図再考	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田林啓・坂尻彰宏	4. 巻 24
2. 論文標題 米国所蔵絹本着色敦煌画三題の位置づけ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪市立美術館紀要	6. 最初と最後の頁 9-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Satomi Hiyam
2. 発表標題 Multicultural Dunhuang: Syncretic Buddhist Caves at Mogao in the Early 6th Century
3. 学会等名 Transnationality and the Silk Roads Webinar Series, The Dunhuang Foundation and Rice University's Department of Transnational Asian Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 島津弘
2. 発表標題 中国，河西回廊における石窟寺院が立地する地形 - 莫高窟および榆林窟 -
3. 学会等名 日本地形学連合2022年秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 島津弘
2. 発表標題 中国，河西回廊および莫高窟周辺の地形環境
3. 学会等名 立正地理学会2022年度（第76回）研究発表大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Official Square Seals of the Old Tibetan Empire: Official Seals and Documents
3. 学会等名 16th Seminar of International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Local military governments (khrom) in the Hexi area and "the great military government" (khrom-chen-po) in Long-cu
3. 学会等名 清華大学人文学院成立10周年院慶活動漢藏佛教語文学系列講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 檜山智美
2. 発表標題 歴史史料として読むシルクロードの仏教壁画
3. 学会等名 浄土宗教学院研究会（東部）、於大正大学（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 島津弘
2. 発表標題 中国，敦煌付近の石窟寺院がつけられた地形と堆積物の特徴
3. 学会等名 日本地形学連合2023年秋季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩尾一史
2. 発表標題 出土史料からみた古代チベット帝国の支配体制と敦煌
3. 学会等名 国際シンポジウム「敦煌・吐魯番研究の最前線：その伝統と革新（招待講演）（国際学会）」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Ines Konczak-Nagel, Satomi Hiyama, and Astrid Klein (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Dev Publishers & Distributors	5. 総ページ数 436
3. 書名 Connecting the Art, Literature, and Religion of South and Central Asia: Studies in Honour of Monika Zin	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	島津 弘 (Shimazu Hiroshi) (90251909)	立正大学・地球環境科学部・教授 (32687)	
研究分担者	岩本 篤志 (Iwamoto Atsushi) (80324002)	立正大学・文学部・教授 (32687)	
研究分担者	橘堂 晃一 (Kitsudo Koichi) (00598295)	龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員 (34316)	
研究分担者	佐藤 貴保 (Sato Takayasu) (40403026)	盛岡大学・文学部・教授 (31203)	
研究分担者	岩尾 一史 (Iwao Kazushi) (90566655)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	
研究分担者	赤木 崇敏 (Akagi Takatoshi) (00566656)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	田林 啓 (Tabayashi Kei) (10710402)	地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪市立美術館・学芸員 (84433)	
研究分担者	檜山 智美 (Hiyama Satomi) (60781755)	国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員 (32697)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------